

転生したら幸せになりたい件

こねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら異世界にいた、漫画や小説で見たようなファンタジーな世界。

自分が主人公になれると息巻いていたが、現実には重くのしかかる。

この世界で、自分は幸せになれるだろうか？

※暗いけど、明るくしてくよ！

※いきあたりばったり。

目次

第1話	1
第2話	5
第3話	8
第4話	10
第5話	13
第6話	16
第7話	19
キャラ設定	
キャラ設定①	21
魔王襲来編	
第9話	23
第10話	26
第11話	28
第12話	31
第13話	34
第14話	37
第15話	41
ピエリスの花	
第16話	43
第17話	45
第18話	49
第19話	53
追いつけ追い越せ	

第
24
話

第
23
話

第
22
話

第
21
話

第
20
話



66



63



61



58



55

第1話

「死んだら天国や地獄に逝ける、そんな事を一度は考えた事がないだろうか？」

それとも死んだら魂は違う場所で転生したり、死んだらそこで全て終わりだとか。

死んだ先の事は死んだ本人にも分からない、他の人間だって分からない。

だからこそ生きる事に必死にもなる、生きる事に絶望して自殺する者もいる。

とても業が深いモノだ。

◆ ◆ ◆
肩で息をしながら先程まで生きていた魔物の首を落とす。

襲いかかる魔物を何十体、何百体倒したか分からない。

手にしていた剣はとづくに使い物にならず、全身に返り血を浴びて気味が悪い。

この世界に喚ばれて召喚されてからもうどれだけの月日が流れたか忘れる程の戦いの日々。

自分を喚んだ召喚者が死ぬまで、召喚の際に課せられた呪いは解ける事は無い。

この世界に来てから何十年、高齢になった召喚者はそろそろくたばりそうだが死ぬ前に自分を殺すのが普通だろう。

積み上げてきた実績、栄えさせた家に対して復讐され根絶やしにされる可能性が高いだろう。

召喚された数年間は殺す事だけを考えていた、けれど召喚者の所の子供を見たときにやはり残忍になれる事はなかった。

死なずにいれたらどこか静かな場所で一息つきたい、それから身の振り方を考えればいだろう。

生きていたら、ならば。

「ば、化け物めっ……！」

生き残りの魔物が恐怖に顔を歪めながら、震えた口で言葉を漏ら

す。

化け物、今の自分に一番似合った言葉を口にされて思わず口元が上がる。

理不尽につれて来られ、理不尽に戦わされ、最後には化け物と言われる。

「っ、くくっ……、そうだ、化け物だ、言われなくてもわかってるさ」
震える魔物を背にして、唯一の生存者を残した戦場から帰路へとつく。

後ろから叫ぶ声が聞こえるが耳障りなので、使い物にならない剣を大きく後ろに投げ捨てる。

運が良ければ避けれる、運が悪ければそれが突き刺さって終わるだ。

「あ、っ、」

濁ったうめき声と肉が裂ける音、運が悪かったようだ唯一の生存者は飛んできた剣を避けられず戦死した。

可哀想にと心にもない事を思いながら、血まみれの服を脱ぎ捨てる。

「化け物か……さもありません」

何時になつたらこの地獄の様な日々に終わりが来るのだろうか。

一抹の不安はある、この環境から脱した所で幸せはあるのだろうか。

もつと地獄の様な日々が待ち受けて、暗闇の中を歩いて行く事になるのではないかと。

「おやおや、いつも辛気臭い顔しとるなあ……そんなんじや夕飯が美味しくないで！」

「糞ピエロ」

「相変わらず口悪やな！」

頼んでもいない新しい服を片手に胡散臭い道化こと、中庸道化連の享樂の道化、ラプラス。

飄々とした態度が気に食わないが持ってきた服を搔つ攫つて服だけは綺麗にする。

「今日も快勝だね！よっ！」

「いたい、いたいっ」

次に現れたのは可愛らしい仮面をつけた道化、ティアアドロップ涙目のティア、ティア。
ア。

その後ろに怒った道化のフットマンがいる。アングリービエロ

ティアは肩に飛び乗ってきて血だらけの髪や顔を拭いてくれるが、手加減してないので普通に痛い。

「お前らが来るって事は、何か悪い事でもあったのか？」

ティアを強引に引き剥がし、フットマンに投げつけながら質問する。

空中で何回転しながらフットマンに受け止められたティアは小馬鹿にするように笑う。

「ふふふっ、実はね……実は!!」

「あなたの召喚主の屋敷は焼き討ちされ、あなたは晴れて自由の身になりましたってわけや」

「あっー!!ラプラス!!アタイが言おうとしたのにー!!」

「はっ……っ？」

唐突な事で思考が停止する。

焼き討ちされて全て灰になった、自分を召喚したアイツは誰か知らない奴らに焼かれ死んだ？

自分が殺したかった、殺す理由があった自分が殺せなかった。

自由の身になって、気にする相手ではなくなった筈なのに黒い感情がぐるぐると渦巻く。

これは嫉妬なのか、羨望なのか最早自分でもわからない。

けれどー

「なあ、ラプラス」

仮面の下でラプラス、ティア、フットマンは笑っている様に見えた。自分が滑稽だと嘲笑っているかもしれない。

けれど、そんな事を気にする余裕もない。

「自由の身にしてくれた、命の恩人に会いたいんだけどさ……教えてくれない？」

このぶつけようのない感情を、誰かにぶつけなければ生きていけない。

醜い化け物になってしまう前に。

「ええで、教えたるわ」

「じゃあ、ついてきて！」

三人の道化に連れられ、血まみれの戦士は歩いていく。

その先にどんな未来を孕んでいるのかも知らず、衝動のままに進んでいく。

第2話

復讐とは、復讐したい相手に対する憎しみをぶつける事。

復讐する迄の行動力は凄まじいもの、まるで森を燃やし尽くす火のように勢いは止まらない。

しかし復讐を終えた際、ぶつける先が無い憎しみや怒りは虚無感へと変わる事もある。

喪失感、虚無感、この先どのように生きていくか考える事さえ出来ない。

中庸道化連に教えられた先は、金を積みめばどんな汚い仕事をする盗賊団の洞窟。

皆殺しにする事自体は簡単だ、しかしこんな奴らに憎しみを奪われたかと思うと腸が煮えくり返る。

踏みつぶす前に盗賊団の頭に依頼者を問い詰めたが、この盗賊団も所詮は使い捨て。

更に仲介を通しての依頼だったので、詳しいことは分からない。「ちっ、」

やれやれと落胆しつつ、虫を潰すかのように頭を踏みつぶす。

呆気ない幕切れ、声を上げる前に事切れた肉塊を蹴り飛ばして八つ当たりをする。

(畜生、畜生、畜生、畜生！)

怒る必要も無いのに感情が乱れる。

止められない負の感情が苛立ちを加速させる。

皆殺しにした盗賊団の洞窟から出ると、ここまで連れてきた道化達はいなくなっていた。

彼らも怪しいと考えるべきだが、いまの自分は考えが回らない。

(この先、私はどうしたらいいんだ)

人や魔物を倒す日々、自由を憧れていた筈。

しかし今は感情のまま誰かを殺し、苛立っている只の獣に成り下がっている。

(嗚呼、どうしたらいいんだよ)

いきなりつれて来られた世界で、家族もいなければ友人もない。わけも分からない力を与えられ、絶対服従でしたくもない殺しもしてきた。

足掻いて何時か自由を手に入れたかったと、そんな思いが叶った先で。

ぶつきたい怒りの矛先が無くなっただけで、狂いそうになっている。

(いっそ、自死でもすれば楽になるのか)

力なく地面に座り項垂れる。

さつきまで湧き上がっていた怒りは一転して、冷えきった黒い闇へと変化していく。

剣は無いので自分で自害する事も出来ない。

盗賊達のナイフでも奪ってこればよかったが、残っている自尊心がそれを許さない。

あんな奴らの使う物で死ぬなんて真つ平ごめんだ。

「絶望しとるなあ！あんたのそんな顔は初めてみたけど、いい顔してるわ！」

いつの間にかラプラスが目の前にいた。

言い返す気力もわからないので言葉を聞き流す。

「……言い返す気力もないか。まあええわ、そのままでええから聞いとけ」

「いまのあんたはんはやることないやろ、けど殺したかった相手を殺した相手を殺したいやろ？」

言われて思うが、酷く絡まった事になっている。

殺したかった相手を殺した奴に復讐する、負の感情だけで形成されたような言葉だ。

「その復讐先、こつちで探したるわ」

「……今の所、お前らが一番怪しいってわかってる？」

「はははっ！そりやそうや、けどなそんな奴がこんな堂々と提案してくるわけないやろ？」

仮面の道化は嘲笑う、全てを見透かすような物言いに苛立ちながら

立ち上がる。

「わかった、受けてやる」

「おっ、ええ返事やじやあな……」

もうこうなったら、地獄の果てだって逝ってやる。

「スライムの所に、いつてくれへんか？」

「……はあっ？」

第3話

ラプラスの事は前々から変なやつだと思っていたが、遂に遂に遂に気が狂ったのかと後ずさるがラプラスは気にせず話を続ける。

「オークロード豚頭帝の事は知つとるやろ？」

「……ちよつと前にティアが話していた気がするな、確か新しい魔王になる予定だった奴か」

「せや、もう死んだから失敗したんやけどな」

合点がいった、そのオークロードを討伐したのがそのスライムと言ったわけか。

今まで一方的に話しかけてきてきた、道化達の意図が少しずつ紐解けた。

確かジュラの大森林に魔物の国を作り、何万ものオーク豚頭族を退け見事オークロードに打ち勝つたと。

「別にそのスライムを殺せとか言うわけやないで、ただ潜り込んで情報を集めるだけでええんや」

ラプラスが提示する事は――

- ・ただその国に行けばいい。
- ・気がのつたら情報教えてくれればいい。
- ・それ以外に制約は無い。
- ・誰を殺そうが敵対しようが構わない。

「ごつちのメリット云々は言わんが、そつちにメリットが全く無いんじゃないか？」

「話は最後まで聞きや、あんたにはこれの実験台になつてもらはん」

ラプラスの手から小瓶が手渡される。

中身は柘榴色ざくろいろをした液体というよりも粘液に近い物。

ろくな物ではない事は重々承知してるが、

「これは……う？」

「なんの変哲もあらへん！ ただ、オーガから作った製造工程秘密の物！オーガの力が手に入るかもしれんが肉体がグチャグチャにかき混ぜられるかもしれん、それか精神がひん曲がるかもしれん！そもそ

も人の形になるかもわからんな！」

ろくな物をつくらないな、こいつら。

ラプラスが語るにはこの柘榴色の粘液は肉体を持つ生き物の3つの位相体をかき混ぜて置き換えるらしい。

アストラル^星・ボディ^幽、スピリチュアル^精・ボディ^神、マテリアル^物・ボディ^質の位相体を乱すなんて劇薬どころか死ぬ可能性しかない物じゃないか。

「けどな、あんたは生きて復讐するんやろ。それぐらい乗り越えられる筈、その為の力になる物やし、あんたが自由の身になった餞別もあるんや」

言うだけ言うとラプラスは背を向けて何処かに去っていく。

ラプラスにかける言葉は無い、向こうからしたら自分は只のモルモット^{実験台}。

こんな世界に、こんな自分に、こんな境遇に、変化をもたらして復讐できるならば。

小瓶の蓋を開けて躊躇なく中身を飲み干す。

喉を焼くような痛みが走り抜ける、気が狂うどころか高揚感が視界を一変させる。

「■■■■■■!!」

手足が、身体が、頭が、精神が、自分が、何かが、全てが、世界が変わる、変わっていく次第に墜ちていく意識の中で最後に見たのはこちらに振り返って笑うラプラスの姿だった。

第4話

両腕を振り子のように振り、心臓が破裂しそうに脈を打っても、肺が悲鳴をあげようとも兎に角走る。

遮るものは全て薙ぎ倒して進み、本能のままに行動する。

今の自分は本当の化け物だ。

抑えられない攻撃的な感情は、アイツがいった場所へと向けられる。

これが目的だったのかと一瞬だけ考えたが、誰が自分に命じたのかも、そいつの顔も名前も思い出せなくなってきた。

けれど嫌な事も面倒な事も考えずにすむ。

ただ動いて壊し、走って壊すだけを考えていられる。

身体の中から全て変わる痛みは途方も無いものだった、何日ものうち回って目が覚めた時には自分の身体が自分の様に思えなかった。

前頭部左側から大きく角が生えた事には気づいた、それ以外は後から考える。

と言うか考える時間が勿体無い。

数日も走り続けてようやくジュラの大森林が遠くに見えてきた、息もあがらなければ疲労感も無い。

開拓されてる部分が遠くから視認できる、あれが誰かが言っていた魔物の国なのだろう。

幾つもの強い個体の存在を認識できる。

その中でも一番桁違いな存在がこの魔物の国の王なのだろう。

口元を釣り上げ、抑えられない高揚感を身体全体に力を込めて、飛

びだす！！！

どうしたらいいんだ

(殺してやる！)



ジュラの森大同盟が結成され、魔物の町に活気が溢れ文化が進化していくある日の事。

スライムこと、リムルⅡテンペストは突然現れた来訪者に驚いていた。

(……何だ、こいつ?)

数分前にキジン鬼人族のソウエイから正体不明のオーガ大鬼族と思われる者がジユラの森に接近していると報告があった。

リムルは最初オーガの里の生き残りと考えたが、それならばソウエイが急に報告をしてくる程の重要性が高いものとは考えられない。

それこそソウエイがそのオーガと対面して、その後に報告するのが確実だ。

「……い、た」

オーガは辺りを見回しリムルを視認して言葉を漏らす。

リムルは目の前に現れたというか、降ってきたオーガを見て理解した。

ソウエイが言ったオーガは明らかに普通ではない状態だ。

禍々しく生えた一本の角。

血まみれの服に血まみれの身体、皮膚も所々裂けていて地面に血の跡を残している。

しかしオーガの表情はそんな事をまるで気にしていないように、笑っているのだ。

普通の状態ではないのは一目瞭然。

「うおっ!?!」

予備動作も無しに飛び出したオーガはリムルに対して拳を放つがリムルは回避して距離をとる。

拳は地面を抉り、砂埃を撒き散らしながらオーガは地面から拳を抜いてリムルを見る。

殴った拳は血みどろになりながら再生を繰り返す、不完全なのか傷は完全に癒えていない。

〈告。オーガの魔素反応の異常、続いて生体反応の異常、このまま過度な戦闘を行うと対象の生命維持に危険を及ぼします。〉

リムルのユニークスキル、大賢者がオーガの生命に対する警告を進言してくる。

このまま暴れさせたら周りにも被害が及ぶ、唐突に現れて唐突に死んだら夢見が悪くもなる。

「いきなり現れて、いきなり暴れて、今は忙しいんだから大人しくして
もらうぞー！」

大きく息を吐き、リムルは目の前のオーガを助けてやるなんとかしてやることにした
のだった。

「殺、して……やるッ！」

第5話

自分は一番強い奴の前に降り立った。

そいつは青みがかった銀色の髪に金色の瞳の人間の様な姿をしている。

誰かが言っていた形とは違うが、本能は告げているこいつだと。

「……いい、た」

間髪いれずに飛びかかり手加減なしの一発を打ち込むが簡単に回避されてしまう。

止める事も出来ない拳は地面を抉って止まる。

腕全体に鋭い痛みが走るが直ぐに慣れる。

感情が止まらない、止められない。

このまま蠟燭の様に身体が燃え尽きようとも、灯った炎で誰かを焼かないと収まらない。

『……………!!』

銀色の人間が何か言っているが、何を言っているか分からない。なっていた。

自分は堕ちる所まで堕ちた、既に人間でもなければ鬼でも無い。

半端モノに。

「殺、して……やるッ！」

手のひらサイズの瓦礫の破片を握りしめ、力の加減なく飛び出して拳を振るう。

スキルや戦術や色々なできた事が出来ずに、ただ殴りかかるしか自分にはする術がない。

『……………』

自分が突き出した右腕は簡単に掴まれ、そのまま力任せに地面に倒される。

本能的に抜け出そうと手を振り払おうと藻掻くが、華奢な見掛けとは裏腹に手を振り払う事が出来ない。

ならばと空いている左腕で、右腕を千切ろうと掴もうとしたが飛んできたクナイが手の甲に刺さり地面に突き刺さる。

両腕が使い物にならない、しかし止められない衝動が暴れる事を駆り立てる。

「あ、うあ!!」

藻掻く、藻掻く。

傷だらけの身体で藻掻くたびに、傷口から滲み出る血。

何をやっているんだ、力を得たのに自分を売ったのに結果は何も得ずに終わってしまうのか。

ならば、誰でもいいから殺め、誰でもいいから私のように絶望してくれ。

「ここまでだよ、ちょっと休みな」

銀色の人間、もといスライムはそう言ってくれた。

既に周りには力を持つ魔物達が集まり、事の顛末を見届けている。なんと圧倒的か、何と自分が惨めなのか。

そう思うと、スライムの言葉にこう返してしまった。

「いや、だ」

睨みつけながら舌を噛み切ろうと口を開く。

少しだけスライムの表情が歪んだが、自分が舌を噛み切るよりも前に意識を一発で落とすような拳骨によって意識を失った。

◆ ◆ ◆

スライム

リムル||テンペストside

「シー・オー!ンっ!!」

「すみません!っ!つい!っ!」

舌を噛み切ろうとしたオーガにとっておきの一発をお見舞いしたシオンを呼ぶ。

当の本人はてへぺろって舌を少しだしてウインクのごまかし。

いや、誤魔化せてないからな!

シオンの拳骨を受けたオーガは意識を失って大の字で倒れている。

辺りの修繕はオークに任せるとして、とりあえず傷らだけなので回復させないといけないな。

《告。このオーガにフルポーションの使用は推奨しません》

え、なんでえ？

大賢者の突然の言葉に驚き、使用しようとしたフルポーションの手を止める。

《解。このオーガの血液を解析鑑定した結果、人間とオーガが混ざり合っている状態と判明しました。この状態でフルポーションを使用すると、身体の完治が出来たとしてもどのよう^にに治るのか不明な状態です。》

人間とオーガが混ざり合っている。

つまりはこの角つ子ちゃんはもともとオーガではなく、何かの原因によつてこの姿になってしまった訳なのだろう。

そうなると治すとしても、どうやって治るのかが確証がない状態なのか。

《告。現時点では回復を推奨しません、但しどちらかに主導権が移り、人間に戻るかオーガに戻るかすれば完全な治癒が見込めます。》

不安定な状態から人間か魔物かのどちらかに安定すれば治癒ができる。

なら、どうやって安定させればいい？

《解。早急な治癒が必要な状態ならば、名付けをして名持ちの魔物ネームドモンスターとして進化させれば魔物として安定します。その代わり、人間には戻れなくなります。》

人間として安定させる場合は？

《解。現時点での人間として治癒の見込みは時間の不足、対象の生命に危機をもたらす可能性が大きいです。》

大賢者さん、それともう一択しかないって事じゃないですか。

助けると言った手前、危険な橋を渡るのは避けたい。

こつちの一方的な善意で、この角つ子のこの後の運命を左右する。

しかし、俺はこいつを死なせる事は出来ない。

あんな悲しそうに笑う姿を見て放っておくなんて出来ないし、シオンに謝らせる機会を与えるために助けさせてもらうぜ。

「お前の名前は、ー」

第6話

私は目を覚ました、見たこともない天井に見たこともない部屋で。徐々に覚醒していく意識の中で思い出す、どうしてこうなって何をしでかしたのか。

自暴自棄になって、口車にのって、他人に八つ当たりして、見事に負けた。

見事に空回り全開ではないか、とても頭が痛くなる。

「おっ、目が覚めたみたいだな」

「あ、っ、」

上半身を起こして辺りを見回していると部屋の扉が開いてあの時の青みがかった銀色の少女……いや、少年？が入ってきた。

「よかった、よかった。あれから目を覚まさなかったから心配してたんだぞ？」

そう言いながら備え付けられている椅子に座り、こちらをじろじろと観察してくる。

見られるのは嫌いだけど、仕出かして介抱された身分で見ないで下さいとは言えない。

取り敢えず謝っておこう。

「……」迷惑かけました、いきなり殴りかかったり物を壊したりして「あ、こつちを見て呆気にとられている。

確かにこんな事を言うような外見はしていないけれど、今は気持ちが悪く落ち着いているので冷静に謝罪できているのだ。

「何ですか……その顔は」

「いや、思ったよりも丁寧だったんでな」

確かに目つきは鋭いし、黙っていたら子供に怯えられた事もあった。

慣れてはいるが、そんなふうにはやはり思われてしまうか、反省。

「まあ、落ち着いてるみたいだし。なら、これからの事と今のあなたの状況について話して、あとはどうしてあんなふうになったかを聞いた
い」

ここから少し長くなるがその前にと相手は自己紹介してくれた。
彼……いや、彼女？

とにかく私と戦った人はリムルⅡテンペストと名乗り、人の姿からスライムの姿を見せて一通りの事を告げてくれた。

まずは今の自分の状況。

リムルさんを襲ったが軽くないなされ、そして自暴自棄になって自ら命を断とうとしていたので気絶させられたらしい。

何故か、酷く頭が痛む気がするんだが……何でだろう？

(頭が痛いつていったら、リムルさんは苦笑していた)

その際、中途半端になった身体のせいで治療をする事が困難になり。

名付けをして自分を魔物としてして進化させ、強引に定着化させて治療した。

つまり今の自分はオーガから進化したキジン鬼人族となったわけだ。

人間をやめてしまった実感はあまり湧いて来ない、けれど自分から生えている角を触ることでしっかりと認識するしかなかった。

次に私自身の事。

これに関しては記憶が朦朧けになっている部分もあるので、この世界に来てからの事を覚えている限り話すことにした。

改めて話すとなると気が滅入ってきそうになるが、リムルさんはしっかりと話を聞いてくれているので気を強くもつことにした。

異世界につれてこられ、戦い続け、心も荒んで、許してもいいと思った相手は知らぬ誰かに殺された。

自暴自棄となった私は誰かの口車にのって、あの様な半端な化け物と堕ちた。

語り終えた時、改めて振り返るとなんて子供のように暴れていたのかと少し落ち込む。

目をふせて、項垂れているとリムルさんが唐突に頭を撫でてくれた。

「大変だったな、もう大丈夫だからな」

「……っ!?!」

あ、いけない。

優しい言葉に泣いてしまう、泣いちゃう……いやもう泣いた。

この世界に来てから泣いた事は何回もあつたけれど、制御できないほど泣くのは初めてだ。

目元から涙が溢れだす、拭っても止まらない。

「り、リムル様……!?!」

「はわわ」

二人のキジンが入ってきて、今の状況を見て固まっている。

頭を撫でられ泣いている、しかも今更気づいたが服がボロボロで色んなところが見え隠れしているではないか。

なるほど、誤解されるような状況がてんこ盛りというわけだ。

しかし、あの胸がでかいキジンを見るとどうしても頭が痛む……何でだろう?!

第7話

何とか誤解を解くことに成功し、今はキジンのシュナさんから渡された服とにらめっこをしていた。

布つきれになった服のかわりに新しい服を用意してくれたらしいが、実に女の子らしい物なのが問題なのだ。

いや、私には似合いませんしそもそも性別が違います。

もつと動きやすくして男性が着るような物に変えてもらえませんかと言ったが、変えてもらえなかった、何故。

当初はリムルさんに用意された物らしく、リムルさんがそれを着ることを拒否。

捨てるのも勿体無いというわけで、収納されていたらしい。

いやいや、待ってください。

私の体型ではこんな服を着たら、ただの変態じゃないですか。

それに私は男です、女装の趣味はありません！

その言葉にリムルさんやシュナさん、そして同じくキジンのシオンさんが頭に？を浮かべた。

「はい、鏡」

「えっ、」

リムルさんが立てかけてあつた姿見の鏡を持ってこちらに向ける。

開いた口が塞がらないとはこの事か。

自分が記憶している容姿と、鏡に映る少女の様に見える中性的な外見をしている誰かになっていた。

鏡に映る誰かは手を動かせば同じように動き、表情を変えれば同じように表情を変える。

紛れもない現実。

どうしてこうなった、どうしてこうなった？

いや落ち着け、クールになれ。

逆に考えればこれだけの事をしてきたんだ、罰としてこの姿になったと思えば気が楽になる。

因みに三人にバレないように息子の存在を確認したが、これは大丈夫

夫のようだった……まだ尊厳は残っている！

「イブキさん逃げれませんよ、うふふ……！」

「え、イブキって誰って……シユナさん、お顔が怖いです！リムルさん見てないで助けてくださいよー！」

肩を掴んできたシユナさん、もう片手にはフリフリな服が握られている。

リムルさんに助けを求めようとしたが当の本人は満面の笑顔でこちらを見ているだけ。

ならばとシオンさんに助けを乞うてみようと思線を見たが、こちらも服を持って笑顔を向けているではないか。

四面楚歌ではないか、にじり寄る鬼からは逃げる術なし。

先程流した涙とは違う、恐怖の涙が溢れだす。

(リムルさん、やはり殺しとくべきであったか……?)

(ごめん、俺も止められないと言うか。巻き込まれたくないんだ、てへっ☆)

(え、何普通に心の声に返事しているんですか……?)

ナチュラルに心の声を見透かして、言葉をかけてくるリムルさんに驚きながら、シユナさんとシオンさんのきせかえ人形となる運命を受け入れる覚悟を決める。

「あ、そう言えば後で挨拶に連れてくから程々にしといてやれよー！」

「え、挨拶って、ひいいい!? シユナさん、そんな露出は私には厳しいです!!」

起きてから怒涛の連続で常にえっ、て言っている気がします。

お父様、お母様、貴方達の息子は新たな性癖を植え付けられるようです、なーむ。

キャラ設定

キャラ設定①

2019年2月15日現在の設定

ステータス
Status

名前 Name ??? ↓イブキ ibuki

種族 Race 人間 ↓半鬼? ↓鬼人族?

所属 Belongings ?? ↓ジュラ・テンペスト連邦国

称号 title ー ー 召喚者、血濡れ

・異世界に召喚され縛られた者

異世界人^{召喚者}を呼び出す魔召喚法の行使は禁断の秘儀であり、禁止事項ともされている。

しかし、外的排除のため、異能目当てに独自で召喚を行うと者、国ぐるみで行われているのも事実である。

イブキを召喚したのは家を繁栄させるための、いわば兵器欲しさに召喚に手を出した中流貴族であった。

血生臭い事は危険を伴うが、返ってくる利益が大きい。

召喚者はそこに目をつけて、秘密裏にイブキを使い裏事情に根を這った。

召喚者の呪いに縛れている為、反抗する事は出来ず非人道的をイブキは送っていた。

しかし、ぽつと出の中流貴族が裏に手を出す事はあまりにも危険であり。

屋敷諸共、中流貴族をよく思わない者によって一族郎党根絶やしにされた。

・彼本人の事

少し長めの烏羽色の髪、赤色の瞳、そしてシオンのように一本の角が生えているが少し歪んでおり本人はそれを気にしている。

目つきが鋭く、睨んではいけないのだが怖がられる事があり落ち込んでいる姿が目撃されている。

背丈はリムルと大差なく、中性的になってしまった為に少女と間違えられる事や、リムルが断った服を着せられる姿がたまに目撃されている。

召喚される前の彼は内向的ではあるが、人を思いやる事が出来る優しい子と言われていた。

普通な家族、普通な日常を送っていたと本人の口から言われているが本当かどうかは不明である。

リムルに助けられ、新たな名を与えられてからは誰かの助けになる為に修行に明け暮れている。

身体や種族が変わってしまった為、最初は思うように身体を動かしたりする事が出来ずに難儀していた。

思うように動かせるようになってからは、ハクロウ、ベニマルなどの鬼人族に武の教えを受けている為少しずつ成長している。

武器よりも体術を主に使い、力で解決するシオンと馬がよく合う。

Power is God

武器を使えなくはないが好んで使うほどでもない。

名前を貰ったからの彼は温厚で、真つ直ぐに生きようと考えているが空回りしやすく辺りの者から心配される時も多い。

深みに嵌ってしまうと中々抜け出せない部分があり、それは名をつけてもらう前の影響であるとされている。

鬼人族となり、過去を捨てる決意をしたが。

全てを捨てきれるか不安な部分があり、そこを気にされており、過去を全ては喋っていないので何が起ころうか……？

魔王襲来編

第9話

三十分程の着せ替えショーで私もとい、イブキの精神は限界に達していた。

衣装を数着着れば開放されると思ったのだが、後から衣装が出るこ
と出ること。

最後の方は瞳から光がなくなって、闇落ちしそうになっていた。

満足した二人によりやく開放されたが、流石にスカートで挨拶に向
かうのは嫌だと駄々をこねてよりやく普通の服を着せてもらう事が
出来た。

身長や背丈はリムルさんと大差ないので、リムルさんの予備のT
シャツとズボンを頂いて着ている。

今は挨拶に向かう為にリムルさんの住居へと足を進めている所だ。
そういえば、角が生えたことにより上半身の服がとても着づらい事
に気づいた。

そしてシユナさんが着ている様な着物の様な服か、シオンさんのボ
タンでとめるタイプの服の方がこの先楽だと気づいた。

流石にシャツを着るのに破くかもしれない心配を毎回するのは面
倒なのだ。

(似合ってたぜ、イブキちゃん)

リムルさんの思念伝達で茶々を入れられる。

怒りのあまりじつと睨みつける、睨みつける。

とにかく睨みつけていると人間の姿からスライムの姿に戻って近
づいてきた。

「ボクはわるいスライムじゃないよ!」

「許さん!」

生憎だが私はその台詞は知らないなので、リムルさんを抱き上げて上
下から押ししたり伸ばしたりして憂さ晴らしさせてもらった。

ぷにぷにだ、ひんやりとしていて触り心地抜群だ。

これは抗えないなと思っていると、器用に抜け出して人の姿に戻ってしまう。

もう少しだけ触りたかったが、またの機会にしておこう。

「さて、挨拶に回る前に大事な事があるから言っておこうかな」

真剣な表情のリムルさんに緩んでいた気持ちが引き締まる。

「俺はお前を死なせない為に名前を与え、人間から魔物に結果として進化させた。」

「これから長い時間を生きることになる、人としての生を俺が捨てさせた。」

「有った名前を捨てさせ、俺が一方的に名前を与えた。」

「辛い事があつた事はしっている、だから無理にとは言わない。」

「ずっとここにいろとは言わない、心の整理がいたらここに住むなり、出ていくのは自由だ」

死ぬ様な事をしたのは自分です。

勝手に暴れて、野垂れ死んで当然の自分を救ったのは貴方です。

リムルさんは優しくすぎるんじゃないだろうか、簡単に生きろと言えば私は逆らえないのに。

「一つだけいいですか……?」

「ん、なんだ?」

「何で、助けようと思ったんですか?」

私の言葉にリムルさんは顎を掻きながら苦笑いをしながら言葉を漏らす。

「あんな泣きそうな顔で笑ってたらさ、ほっとけなかつたんだ」

改めて思う、スライムは優しくすぎる。

この優しさに何時か非情な現実が襲いかかるかもしれない、そこで折れてしまわないか少し心配になる。

枯れるほど泣いた涙がまた溢れる、こんなに涙もろかったかと自分を疑いたくなる程に。

長い言葉は不要、涙を拭ってしっかりとリムルさんの方を向いて一言、一言だけしっかりと告げる。

「リムルさん、お世話になります」

「おう、よろしくなイブキ！」

ー固く握手をする。

何時かは心から笑えるようになりたい。

今は疑う心を捨てられずにいるし、過ちをまた犯すかもしれない。けれど、この場所で自分は幸せになってみたいと心から思う。

転生したんだから、幸せになってもいいですよね？

因みに泣いてる姿を偶然見られて、またひと悶着あったのはご愛嬌である。

第10話

元々、私はただの一般人であった。

紆余曲折があつて戦う事になったのだが、戦い方は我流。

粗が目立ち、戦い慣れている者が相手ならば技量や力で簡単に負けてしまう。

ならば、今までどうやって生きてきたかと言うとそれはこの世界に召喚されたときに得たスキルのおかげだ。

ササゲルモノ
『代償者』。

何かを差し出し、何かを得ることが出来る。

得るものが大きければ大きいほど、払う代償も大きくなる。

便利に見えるが、デメリットが大きすぎるのと自発的に使えないのだ。

誘発的に使用され、使用する程に使用者を蝕んでいく。

私は五感や精神が綻んでいくのを体験した。

因みに一度だけ、死にかけて時に無意識に生きることが望んで使ったらしい。

起きれば身体はボロボロの辺りは肉片だらけ、敵味方関係無しと言う制御不能な状態だったらしい。

五感は数カ月は使い物にならなかつたし、今思えばよく生きていたと思つてる。

キジンとなった今でも使えるのかは、不明だ。

消えていてくれたら万々歳なのだが。

「大振りすぎですな」

「あゝあゝっー!?!」

空中に投げ飛ばされ、錐揉み回転をしながら川に落ちる。

そう！現実逃避をしながら考えていたんだよ！

今はキジンのハクロウさんに他の人の稽古が無い時に密かに稽古をつけてもらっている。

体型も変わり、種族も変わり、無茶な戦い方をしない為にもある程度の技量を身につけなくてはならない。

この世界ではアーツ技術と呼ばれる物があり。

これはスキルとは違い、長い努力と厳しい修練により後発的に取得できる力。

魔物よりも魔素を持たず、魔力に乏しい人間が技術を磨いて力を得ることが往々にしてあるせいか、人間が得意とする分野とも言われているらしい。

キジン成りたての私では妖気マジックの操作は難しく、同じキジンであるベニマルさん、シオンさん、そしてハクロウさんに時間がある時に教えを乞うている。

ソウエイさんは見つける事が出来ないし、そもそも少し怖いので話しかけづらかったりしている。

けれど、あの技量は感服の域である。

「もう一回！」

妖気マジックを高め、脚全体に溜める。

溜めた妖気マジックを一点に高め、放出するイメージで飛び出す。

弾丸のように川から飛び出してハクロウさんに向けて蹴り掛かる。

一直線なので簡単に捌かれる事は承知しているので、足に妖気マジックを溜めたまま地面に着地。

残った勢いで両腕を地面につき、下半身を浮かす。

手に妖気マジックを溜め、身体の回転させるための勢いをつけて動かす。

妖気マジックを込めた連続の足蹴りを放つ。

普通に当たれば怪我では済まない威力だが、全てを静かに躲す姿に乾いた笑い声が出そうになった。

「まだまだですな」

「あ、あ、あ、あ、っー!？」

回転の勢いを利用され、先程よりも錐揉みしながら川に戻された。

今の頑丈な身体だから出来る無茶だけど、これ普通の人間なら重症になりそうだ。

第11話

ジュラ・テンペスト連邦国、通称“魔物連邦”テンペスト。

これがリムルさんの支配する領域の国名である。

そして町の名前はリムルさんの名前を使った、中央都市リムルと言
うらしい。

町の名前に名前が使われるなんて流石ですね、そう言ったら頬をつ
ねられた。

まあ、名前をつける時の流れがある程度読み取れるのでわざと言っ
たところもある。

「そんなイブキ君にお仕事をあげようじゃないか、ね？」

「アツ、ハイ……」

ハクロウさんとの稽古が終わり、水浸しのまま町に戻ってきて早々
にリムルさんに捕まった。

リムルさんを抱き上げているシオンさんの前には、ボロ雑巾になっ
ている下位魔人の者達が横たわっている。

礼儀のなっていない者はたまに現れたりするが、大抵はゴブタさん
やリグルさんの警備隊に追い返されるのだけど、たまに能力が高い者
が入り込む事もある。

まあ、中に入り込んだとしても相手が悪すぎるので。

安易な考えで狡い事を企んでいけば、こうなるのは目に見える。

そして、今回の仕事はボロ雑巾になった外に叩き出してくる事。

手段は問わない、だけど死ぬ様な事はしないようにと。

一人だけなら簡単に掴みあげていけるが、今回の雑巾になった魔人
は4人もいる。

往復するのが手間だし、濡れた服をさっさと変えたいので力で解決
する。

「リムルさん、ゴブタさんって町の外にいますよね？」

「んっ、確かにちよつと前に出ていったけど……あー、分かった伝えと
く」

「ありがとうございます」

準備体操をしている自分を見て、リムルさんはどうやって町の外に叩き出すのかを理解してくれた。

あくまでも殺さないようにすればいいなら、後は野となれ山となれ。

「よっ、ごいっ、しよおー!!」

「ぎゃああああつ!!」

力こそパワー、パワーがあれば何でもできる!

リムルさんに教えてもらった方向に魔人を掴み上げ、勢いよく放り投げる。

勿論、落ちるときの事も考えて投げているので高さや速度も死なない程度にしてある。

まあ、死なないけれど大怪我は負うだろうね。

アフターケアにゴブタさんたちに見つけて貰えるのでまだ優しいとは思う。

「さいつ、ごおっ!!」

「うわああああつ!!」

4人目を放り捨てて、大きく息を吐く。

スライム体のリムルさんが苦笑しているように見えるが、気のせいですね。

「イブキ!」

「シオンさん!」

「カこそ!」

「正義です!」

シオンさんと硬い握手をする。

シオンさんは力で語り合うのが好きなタイプなので、放り捨てる姿を褒めてもらえた。

いつもこんな人に抱き上げて貰っているリムルさん、何て恵まれた場所なのだろう……どことは言わないけど。

余談だが、この前シオンさんが淹れてくれたお茶を飲んだ時に気を失ったのは何でだろうか。

疲れていたのかな……?

◆ ◆ ◆
今度、ベニマルさんやシユナさんに相談してみよう。

◆ ◆ ◆
その後軽い雑談を交わしてから、着替えの為に別れた。

ここに来てからの生活は満ち足りた物だ、鼻歌交じりに戻っていると、急に悪寒を感じた。

圧倒的すぎる何かが、向かってくる。

全身に鳥肌が立つ程の脅威に立ち止まって空を仰ぐ。

「イブキー!!」

「り、リムルさん？」

「俺を投げろ！全力で!!」

「は、はいっ!!」

スライム体で全力で走ってくるリムルさんが突拍子もない事を言ってくる。

しかし、強大な何かを何とかする為にに言ってきているのは明確なので迷いもない。

手に乗ったリムルさんを全力で、躊躇も無く投げる。

投げられたリムルさんは弾丸の様に発射されて、狙った通りに門の外へと飛んでいくのを目で追う。

「リムルさん……お気をつけて」

自分が行った所で足手まといになる事はわかっている。

それよりも町の為に動く方が先決なので、急いで服を替えてリグルドさんに合流する。

(冷えて、ぶにぶにだったな……リムルさん)

第12話

用意された部屋で服を着替え、シユナさんに怒られないように、服を絞ってから洗濯カゴに服を置いて家を出る。

シユナさんを怒らせると怖いのだ、この前も服を脱いで置いたままにしてたら笑顔で怒られた。

あの^{シユナさん}人を怒らせない様にしようと、あの時に心の中で誓った。

「あ、イブキさん。大広場に集まるようになってリムル様から言伝が回ってますよ」

「大広場？ 分かったよ、ありがとうね」

「いえいえ」

外に出て直ぐ、^{ホブゴ布林}人鬼族の青年の言伝に感謝しつつ早歩きで指定された大広場に向かう。

大広場に向かう魔物達が増えてきたので、人混みならず魔物混みに巻き込まれないように向かう。

言伝を伝えたって事は、無事にリムルさんが戻ってきたわけだ。

まあ、あの人が^{スライム}やられる訳がないので、当然と言ったところだ。

ふふんと謎の優越感に浸っていると、大広場にたどり着いた。

真ん中に用意されているステージには、リムルさんと桃色髪をした少女が座り込んで話していた。

(あの娘が、襲来した奴なのか……?)

見た目だけなら、普通かもしれない。

けれど改めて感じた、あの時感じた強大すぎる力はその娘から発せられたものだとして理解できる。

大広場に次第に集まってくる魔物達で、彼女の姿を見た事がある者が小さな声で呟く声が聞こえた。

「あれって、魔王じゃないか……?’」

「え、魔王ってあの……?’」

魔王、うーん……言葉だけを聞くと嫌な予感しかしない。

『ええと、今日からこの町に、新しい仲間が滞在する事になった。』
ドルドさん作の魔鋼で作った音響魔道具、通称”魔イク”を手に取り

ムルさんが喋り始めた。

『扱いは客人という形になるので、丁寧に対応してほしい。』

『ただし、この町のルールは守ってもらおう約束になっているので、違反してるようなら俺に知らせるように！』

この町のルール。

自分もリムルさんから教えてもらったが、この町にはリムルさんが決めた3つのルールが存在している。

- ① 仲間内で争わない。
- ② 進化して強くなったからと言って他種族を見下さない。
- ③ 人間を襲わない。

無益な争いを避けるのは理にかなっている。

魔物と言うだけで、討伐の対象にだってなりかねない。

火種は作らない方が吉と言うわけだ。

『ミリム・ナーヴァだ。』

『今日からここに住むことになった、宜しくな！』

ミリム・ナーヴァ、魔王……ってことは。

「なんと!? 魔王ミリム様ではないか!」

「おお、ご尊顔を初めて拝見しましたぞ……」

「それにしても、流石はリムル様だな。あの暴君と、ああも親しげ

にー」

「これで、この魔国^{テンベスト}連邦も安泰というものだ」

周りから聞こえてくる言葉で確信した。

あの桃色髪の娘は破壊^{DESTROY}の暴君の二つ名を持つ魔王……それならばあの強さも納得大納得というわけだ。

リムルさんが魔王ミリムに何か言っているけれど、それも徒労に終わるだろう。

何しろ、ああ言うタイプは自分の言ったことを簡単に変えないからだ。

取り敢えず、向こうから呼ばれるまでは暫く身を隠しておこう。

暫く山ごもりでもしていようかな、うんそれがいい。

(イーブーキークーン……どこ行くつもり?)

(げえっ!? リムルさん、ナニカヨウデスカ?)

(後で、こっち、来てね!)

一方的に思念伝達をしてきて、盛大に釘を刺された。

ため息を大きく吐き、もつと早くに逃げ出しておけばと後悔をしている。

別に自分がいなくてもいいんじゃないのか、只の鬼人族なのですか
ら。

(ねっ!)

(駄目!!)

第13話

「わっははー！避けないと大変な事になるぞー!!」

「ひいいいっ!?!?」

どうして、どうしてこんな事になってしまったんだ……。

ジユラの森を全力疾走しながら、僅かに残っている冷静な心で考える。

大広場でリムルさんに釘を刺され、後で来るようにと言われたが明らかに嫌な予感しかないと、第六感が警報を鳴らしている。

ここで逃げないと、何かとんでもない目に合うと思った自分は、リムルさんの視線が魔王ミリムに向かった一瞬を逃さず。

他の魔物達の合間に隠れながら、大広場から逃走を開始する。

慌てず、悟られず、息を殺してゆっくりと……。

(よしっ……あと少しだ)

途中でリムルさんからの念話が来ないかとビクビクしていたけれど、”何故か”大丈夫だった。

いやまて、こんな簡単に抜け出せる訳がない……?!

ならば、何故声をかけてこない、何故怒らないのか？

(それはっ……!?!?)

「なあ、実はこいつを鍛えてやってほしいんだよ、なあっ?」

抜け出したも思っていた自分の前には笑顔のリムルさん、そして笑顔の魔王ミリムが立ちはだかった。

最初から掌の上、こうなる事も想定済みだったと言うわけか……!!

「あの、えっと……そのお、」

「ほうほう、なるほど……むむむっ」

ぐるぐると自分を凝視しながら回る魔王ミリム、そんなに見られると萎縮してしまう。

相手が魔王なので、下手に逆らうと命の危険を伴うかもしれない。

「よーし、友人の頼みなら仕方ない! お前、名前はあるのか?」

「い、イブキです……」

「よしっ、イブキ! 今日から私の事は師匠と呼ぶがよいぞ、許す!」

いきなりの師匠宣言に面を喰らうがここで反論しようものなら、どうなるのか想像もできない。

なのでここは逆らわずに素直に。

「は、はいっ、ミリム師匠!」

「……!」

あ、自分で言っておきながら師匠って呼ばれて喜んでいる……??

けれど、殺さない程度にしてくださいね……頑丈ではありませんけれどまだまだ弱いので本気は死にます。

(大丈夫、一様は言っておくからさ)

(ホントですか……? リムルさん、もしもの事があつたら枕元に現れますからね)

(ハハハッ)

(笑って誤魔化さないでくださいよっ!)

このような流れがあり、ジュラの森での一方的な修行が始って。最初の全力疾走に繋がる。

確かに強くなる事を望んでいるし、ハクロウさんだっけいつも自分に修行をつけれるわけではない。

けれどリムルさん、これはあまりにもパワーレベルリングすぎませんか。

「ぬわあっ!?!」

「はーははっ!余所見すると死ぬぞ!!」

ミリムさん
師匠から放たれる拳は一発一発がこの身体でなければ致命傷になっっているようなレベルなモノ。

キジンの身体でもキツイ、かなりキツくて泣きそうになりそうだけれどもこんな機会は二度と無いと割り切るしかない。

勝てず、逃げれず、降参できず。

獅子は我が子を千尋の谷に落とすとはこの様な時に使う言葉なのだろうか、早すぎて見えない拳に打たれて意識を失いそうになりながら思う。

(これっ、頭ふっとなでないよね……??)

こちらからの攻撃は全て受け流され、自分は綿毛のように宙に何度

も浮き上がっている。

死角からの攻撃も簡単に見破られ、お返しに強烈な拳をもらう。

これが破壊デストロイの暴君の二つ名を持つ魔王の力、いやかなり遊んでいるに違いないだろう。

数時間続く一方的な修行は、地面に突っ伏して動けなくなった私に気づいてようやく終わった。

「まだまだだな、弟子よ！次はもつと厳しくいくのだ！」

(なんて、恐ろしい……師匠だ)

第14話

疲労困憊で帰ってきた自分を迎えてくれたのは皆大好きなカレー……リムルさんが言うにはカレーを再現した料理らしい。

問題があるらしく、それはカレーの相棒であるお米についてだ。

イネ科に似た植物は発見されたのだが、味も悪く栄養価も低いので完璧な物ではない。

現時点では品種改良をして、美味しいお米を作る事が進められていて、リムルさんの食への欲求が高いことが伺える。

(美味、美味……)

どんな組み合わせでもよく、人によって様々な隠し味があるカレー。

お前が、ナンバーワンだ！

「うまー！！ こんな美味しいもの、久しく食べた記憶がないのだ！！」

師匠ミリムも美味しさに舌鼓を打ちながら、さつそくおかわりをしていく。

自分もおかわりをする為に立ち上がり、師匠ミリムのお皿を持ってシユナさんに手渡す。

「ありがとうございます、イブキはどのくらい食べますか？」

「た、たくさん、食べます……」

無茶苦茶な修行のせいでお腹はペコペコ。

普段は沢山食べたりはしないが、今日は食べなければやっていけない。

少し恥ずかしいので声がうわずってしまい、シユナさんはそんな姿を見て小さく笑う。

補足しておくが、自分はこの町では新参者なのでこちらから頼んで呼び捨てにしてもらっている。

沢山盛られたカレーと師匠ミリムのカレーを持って大机に戻る。

途中で師匠ミリムのカレーを前に置いて、自分の席に座ってカレーを頬張る。

(うーん……うまい！)

「むむつ、弟子のが量がおおくないか？」

「キノセイデスヨ」

量を見比べて師匠ミリムがじつと睨んできたが、食事に関しては譲れないものがあるんですよ。

それに、沢山食べたいならば自分でおかわりしにいきましょうね！

和やかな雰囲気が続ぎ、つかの間の安息が訪れていた。

そんな空気をぶち壊すように、突如爆弾発言した人がいた。

シオンさんだ。

「ところでリムル様。ずっと気になっていたのでありますが、ミリム様にプレゼントされた品、あれは一体なんなのでしょうか？」

目に見てわかるようにリムルさんが動揺した。

師匠ミリムにプレゼントした品とは、ずっと大事にもっているあの容器の事だろうか。

……色からして、蜂蜜の類い？

「やらんぞー！ これはワタシのものなのだ！」

視線が容器に向かったのを危惧したのか、直ぐに容器を隠す師匠ミリム。

「大丈夫ですよ、ミリム様。誰もミリム様の物を奪おうなどと致しませんから」

シユナさんの笑顔での対応で師匠ミリムは安心したのかまたカレーを食べ始めた。

そもそも、この人から物を奪おう等と思う者は誰一人いないだろう、無論死にたくはないからだ。

「そう言えば、何やら芳かぐわしい香りがしますね。ミリム様の持ち物なのかと思っておりましたが、リムル様がミリム様にプレゼントしたものだのですかー」

シユナさんの言葉でさらにリムルさんが慌てている、珍しいのでソウエイさんのように我関せずと知らぬ顔でカレーを食べる事にした。

しかし、そのやり取りをベニマルさんが興味深そうに見ているのは少し驚いた。

リムルさんは観念したのか懐から師匠ミリムと同じ色をした液体を取り

出して、置かれているコップを満たした。

「これは蜂蜜だ。砂糖がないから、代わりに用意した。だが、取れる量が少ないので、皆に与えることはできないんだ」

回された液体を掬って、口に入れる。

この世界に来てから初めて味わう甘味に思わず頬がほころびそうになるが、我に返って気を引き締める。

(うん、やっぱり蜂蜜だった)

シオンさんやシュナさんは驚き。

ソウエイさんは片眉を上げたぐらいだが、ベニマルさんは驚きながらもつと欲しそうな顔をしていた。

あ、甘いのが好きなんだ。

師匠ミリムも掬って舐めているが、貴女は自分のがあるのでしょ！

残り僅かな蜂蜜をそつとベニマルさんに渡し、リムルさんの話を聞く。

「とまあ、かなりの甘味がある。だがこれには薬効もあって、万病の特効薬になるんだ。けれど毒が混入する場合もあるから、抽出には気を配らないといけない。が、それは俺がやっているから問題はないんだがな」

向こうの世界とは勝手が違う。

蜂が花粉を集めて巣に持ち帰る、それをとって終わりじゃない……

この世界の虫も魔物なのだ。

確か、巨ジャイアントハニービー大蜜蜂のように蜜蜂はいるが味はいまいちだとシオン

さんが調理場で言っていた。

考え込んでいるといつの間にか女性三人が顔を見合わせて頷きあっていた。

完全に考えこんでいた、甘味を嫌いな女性はいないといった所か。

(ホットケーキ食べたくなるな……)

パンもどきは作れるので、それを流用して作って……しかし蜂蜜は貴重だし。

顎に手をやって考え込んでいると、違うコップに蜂蜜満たされて置いてあった。

(あとで、俺の分もね！)

(アツ、ハイ！)

いつの間にか作る事になっていた、リムルさんやっぱり食べる事好きですね。

そつと蜂蜜を容器に移し替え、食べ終えた食器を持って調理場の方に向かう。

久しぶりに作る料理、成功するのだろうか？

第15話

夜の帳、ワタシは只ひたすらと歩いていく。

ワタシは誰で、ワタシはどうしてここにいるのか分からない。

自分を知ろうとする事自体、考える事もなかった。

色々な人がいたような気がする。

優しい人、厳しい人、ひどい人、愛した人。

色々な人がいたような気がする。

「お前は、特別なんだよ」

捕まった先で誰かにそう言われた。

特別なんだ、特別なんだからと教えられて牢の窓から差し込む光を浴びていた。

次から次へと変わる風景、一体ワタシの安息の日は来るのだろうか。

「おや、これは面白いホムンクルスだ」
フラスコの中の小人

何百年も前に現れた男は、ワタシを見てそう言った。

お前は何にでもなれるが、お前は何もできない。

だから、お前は役に立ちなさいと全てを教えこまれた。

ワタシは舞台上で踊る道化ピエロなのだ。

◆ ◆ ◆
ーリムルside

イブキが作ったホットケーキもどきはとても美味しかった。

形は不格好だったが、一生懸命作ってくれたモノにケチをつける者なんてここにはいない。

それどころか最後の一枚は誰が食べるのかと、奪い合いになったぐらい好評だったのだ。

嬉しかったのか、イブキが久しぶりに笑っている姿を見て少し安心した。

『久しぶりに作りました、ホットケーキ』

そんなイブキが昼前になっても現れないらしく、ちやうど居合わせた俺が暇なので部屋に見に行っているわけだ。

何時もなら朝早く起き、特訓の為に森に出かけたりしている筈なのだが寝坊でもしているのだろうか？

「おーい！起きてるかー？」

部屋の扉をノックしてみたが、反応はない。

部屋の鍵はかかっていないので、ゆつくりと開いて部屋の中を覗いてみる。

「あ、リムルさん……」

中にいたイブキの表情は暗く、目は泣いていたのか充血していて目は赤くなっていた。



酷い悪夢を見た、何時もなら朝早く起きて修行をしたり手伝いをしたりと動き回っている時間だ。

悪夢のせいで部屋から出る元気もわかず、心配になったのかリムルさんが部屋を訪ねて来た。

「すいません、夢見が悪かったみたいで……」

夢の内容は薄れてしまい、思い出せないが”あれは”自分にとって苦痛の塊に違いない。

冷や汗を拭い、何時ものように身体に喝をいれて奮い立たせる。

夢は所詮夢、落ち込んだり苦しんだりしているよりも今を大事にしないとい！

「……大丈夫か？」

「大丈夫です、リムルさん態々すみませんでした……ちよつと待つててくださいね直ぐに着替えますから」

汗で気持ち悪いので新しい服を取り出して着替えようとすると、リムルさんが外で待つてると言ってきた。

いやいや、男同士(?)だから大丈夫じゃないですかと言ったが、泣いてる所を目撃されたり色々な事があったので用心しているのか聞いてもらえなかった。

ピエリスの花

第16話

魔国連邦テンベストの毎日は目まぐるしく進んでいる。

作り上げていく事は進化の毎日である。

考え、作り、学び。

時には衝突する事もあるが、意見をぶつけ合うことも大事な事だ。

そんな自分は猪人族ハイオークのゲルドさんの街道整備の補助という名目で街道整備の邪魔になりそうな物や野良の魔物を追い払う事をしていく。

別段、自分がいなくてもいいのだが一々対応していたら作業の効率落ちるからだと、リムルさんは言っていた。

それにしても、ここ最近は色々な出来事が起きて息をつく暇もない。

例えば獅子王ピーストマスタ、魔王カリオンの三獣士である黒豹牙コクヒョウガのファビオが魔国連邦テンベストに乗り込み、無礼を働いたので師匠ミリムがぶちのめしてしまった。

さて落ち着いたと思ったら、次は封印されていた筈の暴風大妖渦カリユブデイスの封印が解けてしまい魔国連邦テンベストに向かってきた。

国交を結んだ武装国家ドワルゴンからの天翔騎士団ベガサスナイトも援軍にきて、カリユブデイスと魔国連邦テンベストとの戦いが始まった。

自分は空を飛ぶ術が無いので町の防衛に周って勝利を祈っていた。結果としてあのカリユブデイスは師匠ミリムに向かってきたらしく、師匠ミリムの竜星拡散爆ドラゴ・バスターの一撃で倒された。

本当にあの人は規格外だ、味方なら鬼に金棒だけど敵に回ったと思うととても恐ろしい。

さらにさらに、次は獣王国ユーラザニアとの国交の為に互いに使節団を交わし。

魔国連邦テンベストに来た三獣士から魔国連邦テンベストは国交を結ぶに値する国と認められ正式に国交が結ばれた。

彼らは甚く酒を気に入っていて、デレンペスト魔国連邦ではまだ供給が追いついていない果物の提供をしてくれる事になった。

その時に三獣士の白虎爪ビヤッコソウのスフィアさんに気に入られて、何回も手合わせをしてもらった。

スフィアさんは気が短く、喧嘩っ早い、口調は粗雑だけど彼女は一本気な人だから嫌いにはなれなかった。

けれど、虎の姿で戦うのは普通に恐ろしいのでやめてほしい。

あ、そう言えば師匠ミリムはカリユブデイスを倒してから数日後に仕事があるといつて何処かに行ってしまった。

あの人は来るときも突然だけど、出かける時も突然なので困る。

えーっと、取り敢えず最近あった出来事はこんなもんだっただろうか？

もう色々ありすぎて頭がパンクしそうだ。

そうだ、リムルさんから手を守るようにと防具を貰ったりもした。

カイジンさんやクロベエさんのお墨付きらしく、身につけても不由なく戦えるし、全力で戦っても壊れない優れ物。

(でへへ……やっぱり、嬉しいな)

笑みを必死に抑えながら進んでいると、リムルさんが喰い開いて行った道にたどり着いた。

あの人のスキルで全て喰っていき、残ったのは切り株のみ。

この切り株を引っこ抜いて道を整備、そうしてから石畳を引いて道を作る。

(よーしっ！ さっさと全部引っこ抜きますか!!)

片手で次々と引っこ抜く姿を猪人族の者に驚かれてはいたが、こう言う力仕事は何も考えずにできるので結構好きなのだ。

やはり、力こそ正義!!

(リムルさん、何時ぐらいに戻られるのかな……次までにはもつと上手く焼けるようにしないと)

第17話

——傀儡国、ジスターヴ。

マリオンネットマスター
人形傀儡師、魔王クレイマンは水晶に映る魔物を見て笑みを浮かべていた。

使い物にならなくなったので捨てた筈の魔物、それが今では力をつけて笑顔を浮かべている。

何と滑稽な、思わず口にしながら高揚する気持ちを止められずまた笑ってしまう。

利用できる物は何度だって利用する。

価値が無くなれば捨てればいいだけなのだから。

「何笑ってるの？」

いつの間にか涙目のティアがクレイマンの覗く水晶を横から眺めていた。

映っている人物を視認すると、ティアも可笑しくなったのか笑いながらクレイマンの方を向いた。

「あははっ！まだ、生きていたんだねえ！」

「そうです、しかもかなり重要な位置にまでいてくれる……あの時に実験台良かったと心の中から思っていますよ」

ねえ、そうは思いませんか？

フラスコの小人よ。

「けど、これって別のモノになっているんじゃないの？」

あの時に飲ませた薬、そして魔国連邦での出来事はあの場所に忍び込ませている者に調べさせ、内容を把握している。

クレイマンはティアに一言だけ「大丈夫ですよ」と伝えながら立ち上がる。

「形はどうであろうと、心は変わりません。少しでも心にヒビが入れば、あとと思うがままですよ」

心臓を掌握して従わせるように、心を掌握して傀儡にしてしまえばいい。

そしたら、名前も、記憶も、自我も、全てを捨てさせればいい。

今から自分の元に帰ってくる日が待ち遠しくなる、あの魔物はその姿を見て憎悪するのだろうか、楽しみだ。

(その時の絶望する顔が見れないのは残念ですが……まあ、いいでしょう)

とても面白い、劇を盛り上げるに最高の道化ジエロが踊り始める。

クレイマンにとって最高の舞台になる為、舞台の幕が開くのであった。

◆◆◆

町の中が騒がしかった、何時ものように賑やかな騒がしさではなく混乱による落ち着きのない騒がしさ。

何があったのかと、心配になりながら騒動の場所に向かうと目を疑うような状況が飛び込んできた。

二人の男に一人の女、明らかにこの町には似つかない者達がシュナさんや町の魔物達に殺気を向けている。

人間を襲わないというルールがある以上、どうにか彼らには出て行って貰わないといけない。

(っ、)

身体が重い、全身に虚脱感を感じる。

どうして足が一步前に進まない、目の前で起きる事を止めようと駆け出せずいるのだ。

騒動が大きくなるうとした時、三人の襲撃者を守るように騎士団が現れた。

彼らはファムルス王国の正規騎士団と名乗り、襲撃者を匿い言い分に耳を貸した。

まるで茶番ではないか、あきらかにこいつらはグルで最初から仕組まれている。

「魔物が国を興したと聞いて調査に来てみれば、この騒ぎは何事ぞ！人類の法に従い、我等は無辜なる民である貴君達に加勢致す！」

騎士団は剣を抜く。

騎士団は周囲に押しかけていた魔物の兵士どころか、成り行きを見守っていた只の住人にまで手を出し始めた。

(やめろ、やめろ、やめろ！)

止まっていた足は動き出し、重い体を引きずるように走り子供に剣を振るおうとした騎士の一人を殴り飛ばす。

何人かの騎士がこちらに視線を向け、剣先をこちらに変える。

(リムルさん、すみません。見逃せません、守れなくてすみません)

普段ならば簡単に躲せる攻撃も躲せない、守れる命が守れない。

今まで培って来た事が活かせず、心の中の憎い感情が全てを黒く染めていく。

許せない、こいつらも許せないがあの人三人は絶対に許せない。

バラバラに引き裂いても気持ちは収まらない、目の前で踏み潰しても心が晴れる事はない。

満身創痍になって、身体がぼろぼろになった頃には騎士団は撤退してここを滅ぼすという言葉を残していった。

許せない、許せない、あいつらを追わないといけない。

「イブキ、怪我が……！」

誰かが声をかけてきたけど、傷だらけの身体である騎士団や襲撃者達が去って行った方へと走り出す。

止める声が響くが、これだけの事を仕出かした奴を許すわけにはいかない。

自分を犠牲にしたっていい、あいつらを殺せるなら。

気味が悪い結界の前で立ち止まる、ここを超えなければあいつらは追いつけない。

これだけの規模の結界だ、生半可な力で通る事は出来ないのは予測できる。

(それがどうした!!)

躊躇なく結界を通り抜ける為に突っ込む。

全身が焼けるような痛みを襲われ、傷だらけの身体がさらに痛ましい姿へと変貌していく。

全てを捨ててもいい、この場所を汚したあいつらを許さない。

痛みに耐え続け、大事な何かを犠牲にして結界の外へと飛び出す事が出来た。

結界の外にいた誰かがいたが、見向きもせずに駆け出す。止めようとしてきたが、それを振りほどいて進み続ける。もう追いつけないかもしれない、頭の片隅で悪魔が囁く。けれど、運は味方している。

何故か一人、あの町を襲った騎士が歩いているではないか。

罾かもしれない、けどいるならば殺さなければならぬ。

飛びついて、殴って、殴って、殴って、殴って、殴って、噛み付いて、最後には首を絞めて折ってしまおう。

泣きわめいて、命乞いをしていてもワタシにはお前が人に思えない。

良心が痛まず、騎士の命を絶つ事が出来た。

(は、ははっ……結局、何も変わっていないじゃないか。守る事も出来ず、信じる事もできず、しまいにはまた誰かを殺してしまう)

亡骸の上で一人、項垂れていた。

自ら制約を破り、殺意に駆られた結果は酷く虚しいモノだった。

自分で場所を捨て、手に入れたぬくもりを放棄した。

(お前には何もない、名も、記憶も、意味も。お前は最初から何もなかったんだ、異世界からこちらにきて、帰るべき場所があるなんて作り物の記憶だ。)

頭の中に男性の声が響く。

何処かで聞いたことがある憎たらしい声、顔を上げて辺りを見回すが声の主は見つからない。

(いい夢をみれたか、ならば目を覚ますといい。本当の君は、そんな作り物の過去なんて持つていない)

嗚呼、忘れていく。

あの笑顔や温もり、思いやりが全部誰かに支配されていく。

一つ、忘れていく中で思い出した。

この憎たらしい声の主は、何も無いワタシを買い取った……とある男だった事を。

第18話

《保有者の生命活動の危機を確認、スキル代償者ササゲルモノを発動します。》

《発動による代償は無作為に選ばれ、消去又は一時的なりソースへと回されます。》

《視ササゲルモノ覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、記憶、名前……。》

代償者の対象に選ばれたモノは強制的にリソース化されるか発動における代償となるのだが。

つけられた名前が選ばれた途端、処理が止まり代償者ササゲルモノにバグが発生する。

選べれない対象が存在する事により、処理が進まない。

対象を守る為の行動に移すことが出来ない為、疑似バ的な人格グが産まれてしまう。

生気の無い紅い眼は、ありえない事に驚いて目を見開いたが表情は変わらない。

どうしたものかとエラーになった理由を再試行するが、解決には至らない。

名付けと言う行為がここまでシステムを歪ませてしまった、理由として思い浮かぶのはそれぐらいであった。

仕方がなく処理を再起動させようとした時、一つの生体反応に気づく。

この先のファムルス王国に向かう途中なのか、害は無いだろうと判断しようとした時、その生命反応はこちらに急接近してくる。

《急接近を確認、敵意無し、対象の特定は不明》

「みつつけたあー!!」

◆ ◆ ◆
テンペストが襲われ、魔物達の死傷や張られた結界……。

色々な事がありすぎて俺は頭が可笑しくなりそうだった。

怒りのまま暴れたい、そんな気持ちもあったが今はシオンやゴブゾウ、死んでしまった魔物達を生き返させる事が最優先だ。

シユナからファムルス王国の兵士達を追いかけるように、結界を自

力で抜けてイブキが出ていってしまったと聞いて不安があった。

アイツは心が未成熟なんだ。

常に強くあろうと背伸びをして、自分よりも周りに目を向けてしまいがちだったらパンクしてしまう寸前まで抱え込んでしまう。

今回、俺が魔王となる為にファムルス王国の方へ向かっていれば否が応でも会えると信じていた。

そこで見つけたら、げんこつの一つでもやってやって首根っこ掴んででも連れて帰らないといけない。

そんな事を思っていると、無断で抜け出した馬鹿野郎の背中を見つけた。

どうやって怒ってやろうか思いながら地面に降り、声をかけようとした所で大賢者からの声が。

《告、対象の魔素反応に異常を確認。》

異常……？

それはどう言う事なんだと、大賢者に問おうとした時にイブキがこちらをゆつくりと向いた。

何時ものように爛々としている瞳には光が無く、表情豊かな顔はまるでロボットのようにな表情に。

明らかにおかしいと一目で解り、歩み寄る足が自然に止まっていた。

「お前は、誰だ……？」

外見はアイツに間違いないが、”中身が違う”。

『私は、誰でも、ないです。』

誰でもない？

意味がわからない言葉に眉間に皺を寄せながら、その言葉に質問を投げかける。

「誰でもないって、俺が知る限りではお前は俺が名前をつけたイブキだと思っただが？」

『この身体の持ち主は、今は眠りについてます。しかし、目が覚めたとしてもそれが貴方がしるイブキかどうかは保証できません。』

返ってきた言葉は納得が出来ない内容だった。

肉体は生きているが、精神は死にかけている。

心配していた事こんな形で現実に現れるなんて、アイツは何か悪い事をしたのか？

『貴方は、この人のなんですか？』

唐突な質問に少し驚いた。

向こうから声をかけてくると言った発想が浮かばなかったし、向こうから襲ってくる可能性だって捨てきれなかった。

「大事な……仲間だ！」

『仲間、ですか』

仲間、向こうがどう思っているかは解らないけれど俺からしたらイブキだって大事な町の一員で仲間なんだ。

嘘偽りなく、言える。

『その言葉に嘘偽りはないようですね、なら、消える前に貴方の知らない事を教えてあげましょう。』

「……知らない事？」

『貴方が仲間と言った、この身体の過去です』



イブキは元々、不完全召喚された只の子供だった。

不完全召喚された幼子はスキルを持たず、蓄えられた魔素の行方が無く、短命とされている。

イブキのスキルが見つかったのは余命宣言され、魔素が臨界に達するときに生まれた。

それが代償者^{ササゲルモノ}。

最初の一回目の発動により、代償としてこの世界に来る前までの記憶、ここに来てから余命と宣告された年月の記憶が失われた。

その際の被害は不明、その後は奴隷として拾われて色々な場所を巡りました。

運も良く、スキルは発動する事は無く生き続ける事ができある年月を経つと身体の成長と老化が止まりました。

そして、二回目の発動。

これは新たに買われた魔人の実験にて行われ、同じように記憶と今度は五感を一定期間失うことになりました。

その後、疑似的な記憶を埋め込まれて実験台として手放された。

その実験で必ず殺し、そして利益を得る為に。

しかし、そこでは死なず今に至る。

この代償者^{ササゲルモ}は自分を守る為だけに発動され、”生きる”事だけを目的としている。

今までは肉体の危機で行われていたが、今回は精神の危機により発動された。

そして発動したはいいが、今回は今までと違い矛盾点^{ERROR}が生まれてしまい正式な起動に至らずリムルと話される人格が形成されて今に至る。

第19話

喋り終えた代償者^{ササゲルモ}は大きく息を吐き、俺の目の前まで歩み寄ってきた。

一瞬、身構えたが相手に敵意は感じられないので、警戒だけしておいた。

『リムルIIテンペスト、貴方をお願いします。』

頭を下げてきた代償者^{ササゲルモ}の言葉は意外だった、しかしそんな行動は紡がれる言葉によって直ぐに忘れてしまう。

『私、いやこのイブキとワタシ、^{代償者}食べて終わらせてくれませんか。』

食べて終わらせてくれ。

つまりは殺してくれと懇願している。

助けるつもりは俺にとってそんな要求は呑むことが出来ない、断ろうと口を開こうとするが、頭を上げ言葉を遮るように代償者^{イブキ}は喋る。

『本来はワタシは所有者を生かす為に存在しています。』

しかし、人格が芽生えてから考えました。

ワタシ^{ワタシ}にとつて、生きることには救いにはならない、ならば……』

『貴方になら、今の状況ならば、ワタシ^{イブキ}を殺せれる。』

◆◆◆

全てを忘れ、覚えて笑えるようになって、最後にはまた忘れてしまう。

自分の中のもう一人の自分^{代償者}は、いつもワタシを守る為に存在していた。

今は、目の前にいる人が誰か解らないけれど。

とても我儘で、とても自己中心的な事かもしれないけれど。

ワタシを終わらせてくれると、心でわかっている。

「そんなこと、そんな事できる筈がないだろう!!」

怒る様に喋る誰か、とてと辛い状況に置かれていて常に選択肢を迫られる誰か。

選択肢を迫られるからこそ、救いたい大きな物があるからこそ、全てを救うと言う傲慢さがあるからこそ、このタイミングでしかワタシ

は救えない。

『ならば、貴方がする事を邪魔します。』

ワタシでは貴方に敵いはしません、時間は稼げます。

その稼いだ時間で、貴方がしようとしている事が失敗するかもしれない。』

それは望んでいないでしょうと、そう言つてワタシは苦笑する。

貴方は10を救わなければならない、ならば1ワタシを捨てればいいのだ。

元々、この物語の異物である。

ならば幕切れは無辜の怪物として、エンドロールを流せばいい。

俯いたあの人は静かに歩み寄り、ワタシを抱きしめながら呟くように謝る。

「……俺は諦めないからな、イブキ」

ここまで言つても、この人は救う事はやめない。

最初から解つてはいたけれど……解つていた？

消えた何かが引つかかっているが、捕食が始まったので考えは何時か来るかもしれない来世の為に取っておくことにした。

「諦め……悪いですね、リムルさん」

最後の一言はワタシだったのか、それとももう一人の私の言葉だったのかは解らない。

けれど、リムルさんは悲しそうな顔をしていたが、瞳からは諦めない強い意思を感じた。

ああ、とても暖かい。

まるで陽だまりで寝ているかのように、安心して目を閉じれる。

さよなら、私にとっての最高の人。

《告。 个体名：リムルIIテンペストの魔王ハイペストフエステイバルへの進化が開始されます。その完了と同時に、系譜の魔物への祝福ギフトが配られます》

追いつけ追い越せ

第20話

右も左も無い、暗闇の中をただ漂う。

ここが死んだ先の世界、又は輪廻転生の輪の中なのだろうか？

ワタシは輪廻転生や、地獄や天国やらの死んだあとの事は信じてはいないが。

ありえない場所において、ここが死んだ後の世界と実感できる今なら少しだけ信じてもいいかなと思っっている。

酷い事をあの人にお願ひしてしまった。

あの人は諦めてはなかったけれど、ワタシはこれで満足なんだ。

ようやく目を閉じ、ゆつくりとできる時間が訪れた。

何も考えなくて、何も心配しなくていい。

ああ、ああ、寂嬉しい、……へぶっ!?

「押忍！ 自分の事を大事に思ってもらえていないと思ひ込んで、馬鹿鬼つ子を助けるヴェルドラ道場始めるぞ！」

「……??？」

急に重力がかかり、地面に落とされる。

しかも目を開いたら大きなドラゴンとドラゴンを嫌そうに見つめる男性。

うわ、絶対に嫌な予感しかしない。

「ムッ、反応が薄いではないか」

「そりゃ、いきなりこの様に迎えられたら引きますよ」

猛々しく、貫禄に溢れるドラゴンから発せられる言葉とは到底思えなかった。

あんぐりと口を開いて呆けていると、ドラゴンの隣にいた炎の男性がため息を吐きながら説明をしてれた。

「私はイフリートと申します、そしてこの方は『暴風竜』ヴェルドラ様です、お名前は聞いた事ありますでしょうか？」

「えっと、すみません、あまり記憶が残っていないので分かりません

……ごめんなさい」

あ、分からないと言ったら目で見て分かるぐらいに落ち込んだ。取り敢えずヴェルドラさんに謝っておきながら、現状を把握したいので話がしやすそうなイフリートさんに疑問をぶつける。

「あの、ここはどこなんですか？」

その質問に答えたのは急に眼を見開いて大声で喋ってきたヴェルドラさんだった。

「ふーははっ！ここはリムルの腹無限牢獄の中だ、イブキよ！」

「……腹の中？」

腹無限牢獄の中って……と言うか何で名前を知っているんですかヴェルドラさ……んっ、って名前？

どうしてその名前が自分の名前だと思うのだろうか、開いた口から言葉は発せずに考えようこんでいるとイフリートさんやヴェルドラさんと違う声が響く。

《告、記憶の部分再生が始まっています。そしてスキル代償者ササゲルモノは乖離し、そこから新たなスキルを構成、代償者ササゲルモノは以下のスキルに再構成と取得されました。》

乖離消失

・代償者ササゲルモノ

生命維持、記憶崩壊、過剰暴走

変異取得

・躊躇者タメラワヌモノ

・変動者カワリユクモノ

・駆走者オイツクモノ

頭が痛い、出会いがしらのヴェルドラさんも相当なモノだったけれど、今の自分の状態もそんな物じゃないか。

しかし、今までは代償者ササゲルモノだけだったのに、どうして3つにも増えたんだろうか？

《解、イブキの代償者ササゲルモノの自動抑制により取得不能。今回は魔王への進化の祝福ギフトによる効果による取得成功。》

考えを読まれ、あつという間に答えをだしてくれた誰か分からない

声の主さん、ありがとう。

第21話

この場所はリムルさんのユニークスキル”捕食者”の中である。もつと簡単に言うならば、リムルさんの腹の中と言う方が分かりやすいだろう。

臆気な記憶が次第にはつきりとしていく。

代償者ササゲルモノのバグが発生して、あいつはワタシを助ける為に食べてくれと言った。

必ずリムルさんは断ると分かっていたからこそ、断れない状況で現れて、脅した。

そうしたらようやく終われると、自分だけ助かる為に相手の気持ちを考えて行動をした。

けれど、今の自分は確かな意識を持ってこの場所にいる。

食べてくれ、そう言ったら事を思い出したら頭が痛くなってきた。

あー……うん、文字にしたらあれだね。

実際、食べられたわけだし。

(なあ、イフリートよ)

(何ですか?)

(何故イブキは先程から表情をころころと変えて、考えこんでいるのだ?)

(……後から振り返ってみると、とんでもない事をしでかしてしまっただのではないかと、自責の念に駆られているのではないのでしょうか?)

小声で喋っているお二方は気にしない事にして、心を強くもたなくてはなるまいと決心する。

ここにいるから生きているとは断言できないし。

それに代償者ササゲルモノは失われたと言う事は、あの時の言葉通りに死んだ筈だ。

〈告、現在の貴方は星アストラル・ボデイスピリチュアル・ボデー 幽 体と精 神 体 みの存在であり、肉体は既に滅んでいます。〉

丁寧に現状を説明をしてくれたのは、リムルさんの究極能力”アルティメットスキル”

ラファエル
「智慧之王」さん。

いやはや、まさかスキルとも対話が出来る何て思いもしなかったから、説明されたときは笑うしかなかった。

まあ、いいや……良くはないけれど。

言うなれば魂だけの状態であるなら、ここに留まるだけの存在にすぎないだろう。

思い出の場所、あの場所には戻ることはないのは残念だけど、今までしてきた事に対する報いならば甘んじて受けよう。

(魂がこれだけしつかりしているならば、依代があれば動く事は出来るのではないのか?)

《解、実現は可能です。》

「えっ、」

身体が無いはずなのに冷や汗が出たような気がする。

ヴェルドラさんと智慧之王ラファエルさんの言葉は何も聞こえなかった、表に

戻れる何て知らない!

そもそも、迷惑や心配だけをかけさせて。

名前をつけてくれた恩人を脅して食挿べてくれなんて言うて。

あれだけの事をしておきながらあわす顔なんて無い、絶対に無い!

だから、ワタシは、ここに、いますのでほっといてくださいね!

《告、それは許されません。》

一刀両断、真つ二つに切られたワタシの言葉は消えていく。

ラファエル
「智慧之王さん、御慈悲は?」

《解、無いです。》

「クアハハハッ! 諦めが肝心だぞ、イブキよ!」

がっくりと無い肩を落とし、不貞腐れて隅の方でいじける事にする。

「まあ、呼ばれるまでゆっくりと待つことだ、案外直ぐに会えるぞ」「会いたくない……」

ヴェルドラさんの励ましの言葉を受け取りながらも、必死に呼ばれない事を祈る。

祈る、とにかく祈る。

(諦め悪いって言っていたし……時間の問題かな……)
(クアハハハッ！その時は笑ってやり過ごすのだな！)
(そんな凶凶太太く生きれませんよ……)

第22話

その後、ヴェルドラさんは突然呼ばれたから行つてくると一言告げてその場から消えた。

常に堂々としている立ち振舞とは裏腹、どこか師匠ミリムと似ている様な気がした。

何時も大変ですねと言うと、イフリートさんは分かりますかと小さくため息を吐いていた。

強いからこそ、それ相応の態度を魅せるのも必要だと思うが。

ーあれは、元々あの性格なんだろう。

《告、記憶の復元が完了しました。》

談話をしているとラファエルさんに記憶についての報告が飛び込。

ササゲルモノ代償者で失われた記憶の復元は遡る程、難しくなるらしい。

自分としては望んで思い出す事はしたくないので、テンペストに来てからの最近の部分を優先にサルベージしてもらっていた。

しかし、とても早いですね。

《否、これぐらいは朝飯前です。》

ラファエルさんの表情が見えるならドヤ顔をしているだろう、そんな気がした。

「もう一つ聞きたいんですけど、いいですか？」

返答は無かったけれど、知りたい事があるので言葉を続ける。

知りたい事は2つ。

どうやってこの場所から出るのか、そして肉体が無い魂だけの自分が外に出ても霧散してしまうのではないかと。

《解、無限牢獄は既に保有されているスキルなので、出る事はスキルが使用されれば可能です。》

なる程、こんな恐ろしいスキルも既に保有しているなんで流石リムルさん……いや、リムル様と言う所。

補足でラファエルさんが言うには無限牢獄は既に究極能力アルティメットスキル“誓約之王”ウリエルに進化しているらしい。

あれ、究極能力アルティメットスキルついていたけれど気のせいだろう。

うん、気のせいだ。

《解、二つ目の回答は、現在ヴェルドラにやっている強化分身に心核ココロを移行させる事によって現界させます。》

《星アストラル・ボディ 幽体があるので移行は確実ですが、姿形は分身に沿う形で形成されます。》

なる程、ヴェルドラさんは今そんな状況で外にいるのか。

姿形は自分の存在自体が不安定なのか、意思が希薄になったせいなのかの理由だろう。

表舞台に出るならば形は向こう側に引っ張られる。

まあ、自分の姿形に未練はないので困りはしないから悩む必要はない。

そもそも、間違えられる事が多かったので今ならスライムマスコットでも構わない。

その方が気を使わなくて済むし、隠れやすそうだし。

《否、後ろ向きな事を考えていますね?》

「いや、そんなこと」

第23話

無限牢獄の中で喋っていたら、急に五感が奪われて意識が何処かに飛んでいく。

まだ、イフリートさんにお別れも言っていないのにどうなっているんだろうと悩むことも出来なかった。

そして、視界が見える様に成った時。

目の前にはとつてーも、笑顔なリムルさん……いや、リムル様がいたのです。

きゃあ、怖い。

「何か、言いたいことはあるか？」

ワタシの目の前には恐ろしい魔物スライムがいますよ、死んじやう。

笑っている筈なのに、全身の汗が止まらなくて口を開く事が出来ずにいます。

目が泳ぎ、必死に言葉を考えるけれど答えは出ない。

何時かは呼ばれるかと思っていたけれど、こうも早く現実に戻されるなんて。

現実はとても非情ではないか？

「……イブキ？」

「アツ、ハイ、」

強化分身で出来ているワタシの身体を悠々と持ち上げ、目線を強制的に合わせながら圧をかけられた。

今のワタシはリムル様と同じスライム体なので、簡単に持ち上げる事が可能なのだ！

どうして、ヴェルドラ様みたいに人間体ではないのだろうかとお思いのその誰かさん！

ワタシが知りたい。

いや理由は分かっているけれど、逃避しなければ心が保たないのだ。

「ご、ごめんなさい……本当に」

余計な言い訳は言わず、一言に誠意を込める。

思いつきりため息を吐きつつ、リムル様はワタシを机に置いてから口を開く。

「まったく、世話ばかりかける何て強情で我儘な奴なんだお前は」
「返す言葉もございませぬ……」

下げる頭があれば地面に擦り付ける程に悔やんでいるし、リムル様が言う事は正しいので返す言葉は一言も無い。

「今度からはしつかりと、周りも頼る事。一人で抱え込むって事はな、周りを信用してないって事にもなるんだからな？」

自分のキャパシティ以上の事を抱え、最後には崩壊してしまう。

誰かに助けてくれと声をかける事自体を放棄して、いつの間にか仮面をつけていた。

仮面の下で泣いていても、周りには分からないのだからまずは言う事が始まりなのだ。

ここまでの事になってからようやく、理解出来たのは我ながら馬鹿だと思う。

「暫くは反省する事だ、勿論罰もあるからな」

罰、色々な事をしでかしたのでどんな罰が来てもしっかりと償う事にしよう。

「シオンの手料理、一ヶ月！」

「ヒエツ、ご無体なっ!!」

すがりつくように慈悲を望んでみたものの、リムル様は邪悪な笑みを浮かべながら「駄目っ♡」と一刀両断された。

「鬼！悪魔！人でなし！」

「はははっ、何とでも言うといい！それに俺はスライムだから人間じゃないんだよ！」

「ぐぬぬっ……」

机に置かれている自分を再度持ち上げ、リムル様はワタシを地面に下ろす。

そこでラファエル^{智慧之王}さんの声が頭の中に響く。

《個体、イブキの人間体への変異の許可を確認》

スライム体だった身体がゆっくりと変異していく。

手足や身体、髪から爪など色々と変わっていく感覚は言葉では言い表わせないモノである。

数秒もかからずに先程までのスライムから、人間の姿へと変貌した。

姿形は主人^{マスター}であるリムル様に寄るとラファエル^{智慧之王}さんが言っていたので把握はしていたが。

見慣れた角が小さくなっていたのは、少しだけショックを受けた。

残っているだけありがたいと思わないといけない、本当にならば残らない可能性もあるのだから。

「さあ、取り敢えず皆に謝りにいくぞ！」

「は、はい……！」

第24話

どうして料理が下手な人は、自分の腕に自身を持っているのだろうか。

味見もしない、調味料は目分量、勝手に食材を増やしたり減らしたり。

あまつさえ、料理に使ってはいけない劇薬でさえも簡単に投入してしまう始末。

「……………」

目の前で蠢く料理の様な物。

最早、これは新たな生命が誕生しているのではないかと、現実逃避をして考えこむ。

そもそも、料理は蠢かないし、こんな摩訶不思議な色をしていない。どうやったらこうなる、どうしたらこうなってしまっただ？

じっつと、と料理を作ったシオンさんを睨みつけてみたがニコニコと笑顔を向けてくれるだけ。

対面にはとっても楽しそうにこちらをみているリムル様がいる。

確に逆の立場なら、ワタシだって楽しそうに見学する事は間違いないだろう。

(ほらっ、早く食べないと冷めるぞ?)

(ぐぬぬっう……死んだら化けて出ますからね!)

(大丈夫、ダイジョウブだよ!)

にまっつと、口元を釣り上げて笑う。

内心の声が聞こえていなければ、絶世の美少女に間違えられるぐらいの美貌を持っていても、これだけ邪悪な考えしたいたら差し引きゼロだ。

決意して、スプーンKETUIで器に盛られている料理を掬う。

料理にしては柔らかいような、硬いような、そもそもザリザリしているような。

本当に、これは、料理なのか?

(いや、ここで観察したらもう食べる事が出来なくなる。そもそも、こ

れから一ヶ月は対面するのだから、勇気を出すんだ!!」

意を決し、目を閉じて料理の様な物を口に運ぶ。

一口、また一口と噛ましめて来たる激痛を待っていたが、一向にその気配は来なかった。

それどころか、美味しいと脳が感じてしまっている事に驚きを隠せなかった。

何だ、恐ろしすぎて味覚が壊れてしまつて、美味しく感じてしまっているのだろうか？

さらに一口、また一口と料理に手を付けていく。

数分後には盛られていた皿は殻になり、その事実が驚愕の真実をワタシに突きつける。

わなわなと手を震わせながらも、リムル様に視線を向けると、そこには先程まで笑顔から真剣な表情へと変わっていた。

「ユニークスキル、料理人」

「なん……ですって!？」

その一言で察した、察せられた。

今までの人や魔物を屠れる程の料理は、あろうことかユニークスキル、料理人によつてもう一度食べたいと思うほどの美味な料理へと昇華されている。

はわわと、思わず口に出しながら驚きを隠せずにいると。

シオンがもう一品、ワタシの前に差し出しながら一声掛けてくれた。

「おかえりなさい、心配していましたよ」

あつ、とまた口から声が出た。

ワタシの顔を知る人は、ワタシがあゝの状況から消息を断った事に心配をしてくれていた。

リムル様は知ってはいたが、改めて色々な人に心配をかけていた事を再認識させられた。

「た、ただいま……すみません、ご心配かけました」

けど、差し出した料理も見た目は料理に見えないんですけど、シオンさん。

にっこりと、笑顔を浮かべながらシオンさんは決意をした表情で語り始める。

「反省しているならば、貴方もリムル様の為に料理に励みましょう！美味しい物は、一日にしてならず！さあ、行きますよイブキ!!」

「え、え？」

首根っこを掴まれて、真剣な表情から笑顔を見せたシオンさんに連れてかれる。

置かれた料理はリムル様がいつの間にか口にしており、見た目が良ければなーと思っていそうな顔をしていた。

リムル様、少し残しといてくださいね！

実の所、リムル様には許されはしたが。

色々な人に心配や迷惑をかけている事に対し、恐怖があった。

今回のシオンさんに会うことだって、本当は裂避けたい事だったけれど。

罰から逃げる事は出来るわけがない、そんな心をリムル様は既に見透かしていたのだろうか。

(ふふっ、俺には隠し事は出来んよ。イブキ君、せいぜい色々な人に怒られたり、実験台になるこった)